

ぬぐ人 あたえる木

- 公園の解体が紡ぐ人と樹木の一情景 -



4110070 はんだ ゆき 作

- Concept -



『公園』では何をするのだろう。

そこには、限られた行為しかないように感じる。
しかし、実際、想像以上に色々な個性があった。

『公園』を解体し、樹木を軸に、秘めた情景を呼び起す。

人が介入して初めて、『公園』が建築化される。
都市の自然の一情景として。

- Starting point -



樹木の織り成す情景を、
どのような建築形態で感じられるのか・・・



それは、たたずむ観察広場が原点となった。
ここは、「境界」に存在し、忘れられた場。

- Site -



地形

敷地は目黒川支流の谷地の最深部にある。

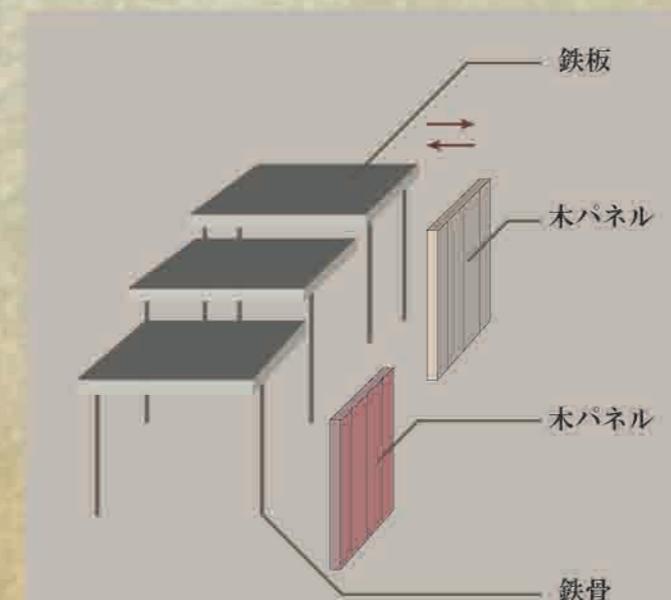
現在、駒場野公園となり、
鉄道や学校、住宅などによって取り囲まれ、
都市の中の「憩いの場」として利用されてきた。



歴史

東京大学が中心的に行った近代農業のため、昭和53年頃まで、
試験田や苗園が一帯に形成されていた。

- Material -



主に階段部は鉄板、人の場は木材で仕切る。

鉄板、鉄骨部分は長期間でもつ一方で、
木パネルは人の用途に合わせて常に可変して行く。



木パネルは周辺の樹木の種類を用い、色を対応させる。

周囲の樹木の素材が建築に投影されて行く。

- Diagram1 公園内の境界 -



駒場野公園内には広場、サンクチュアリ、果樹園、野草園などの場所が設けてある。



しかし、
立ち入り可能な域が決まっており、
人と自然の間には境界が存在する。



① 觀察広場

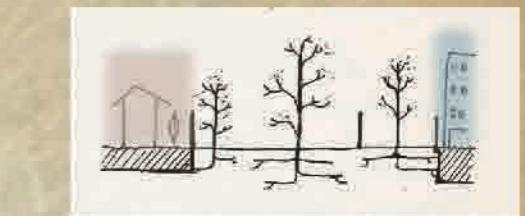


② 雜木林



③ 落ち葉タンク

- Diagram2 公園と周辺の境界 -



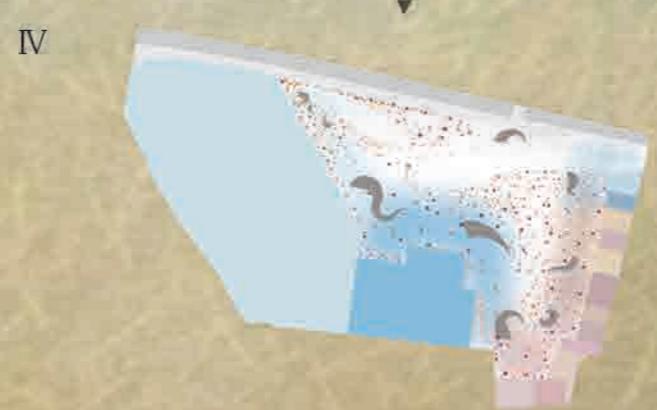
「公園」と周辺の間にも柵による境界が存在する。



境界を無くし、周辺の機能が「公園」内に染み込む。

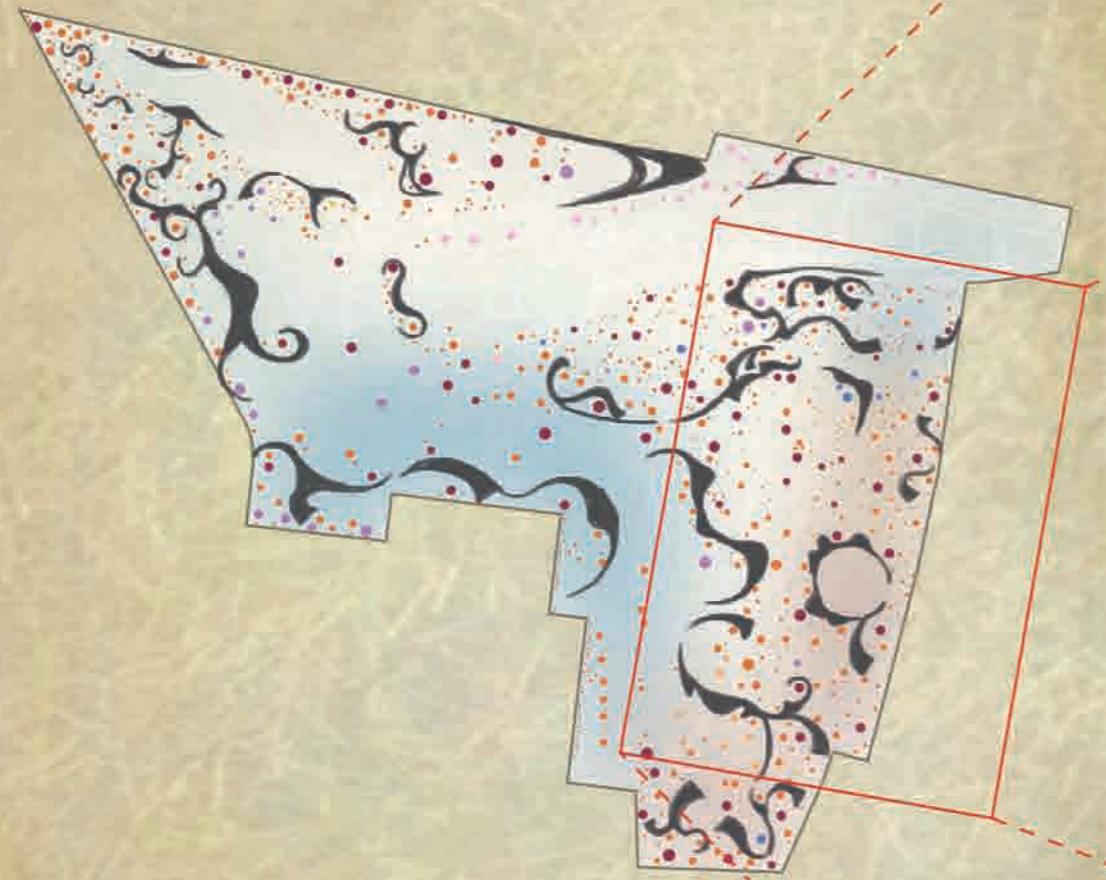


「境界の建築」としてその姿を表す。



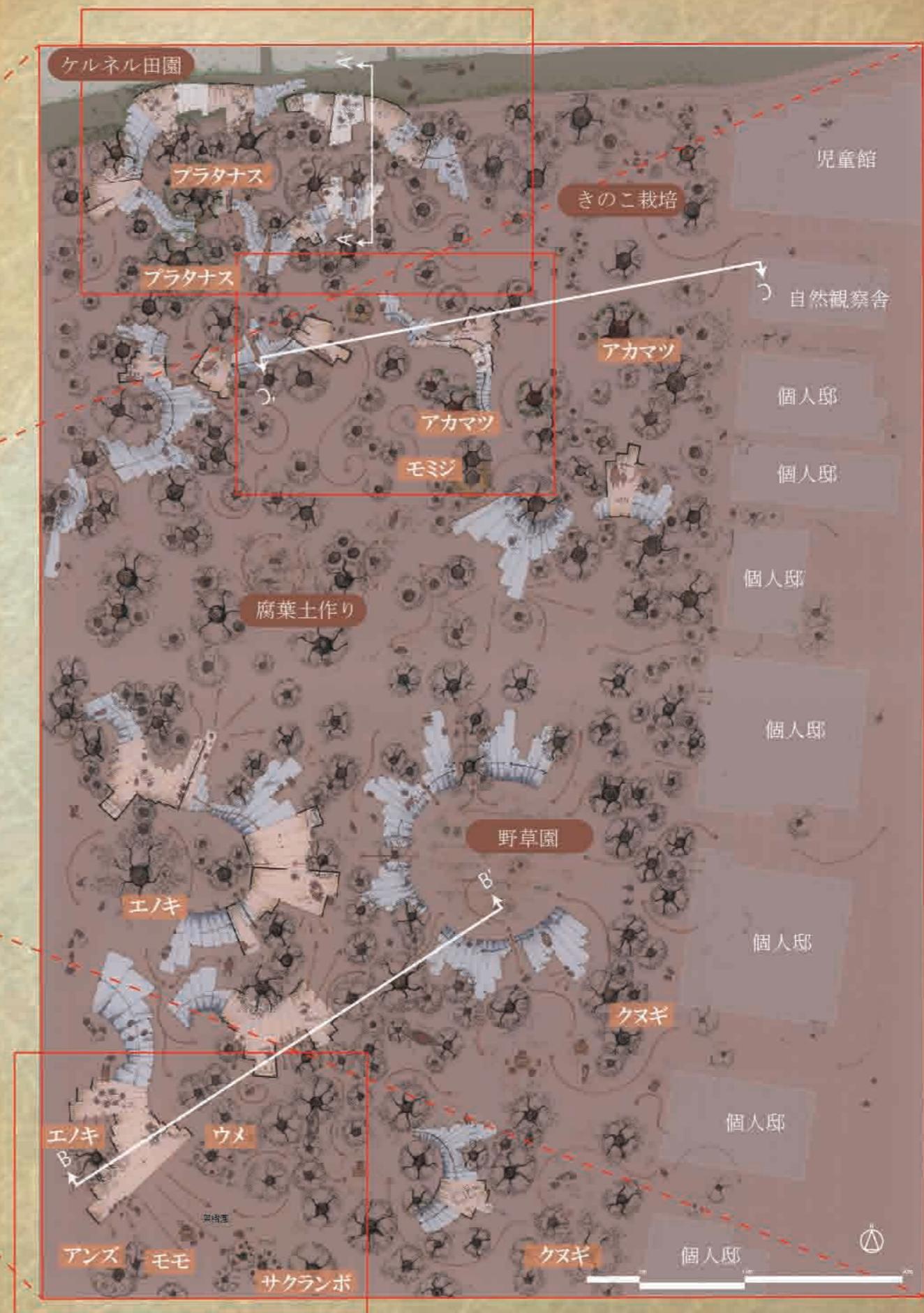
樹木の織り成すリズムに合わせ、建築は動き出し、
人によって用途が与えられて行く。

- Layout drawing -



今回は赤枠内で詳細に設計を行った。

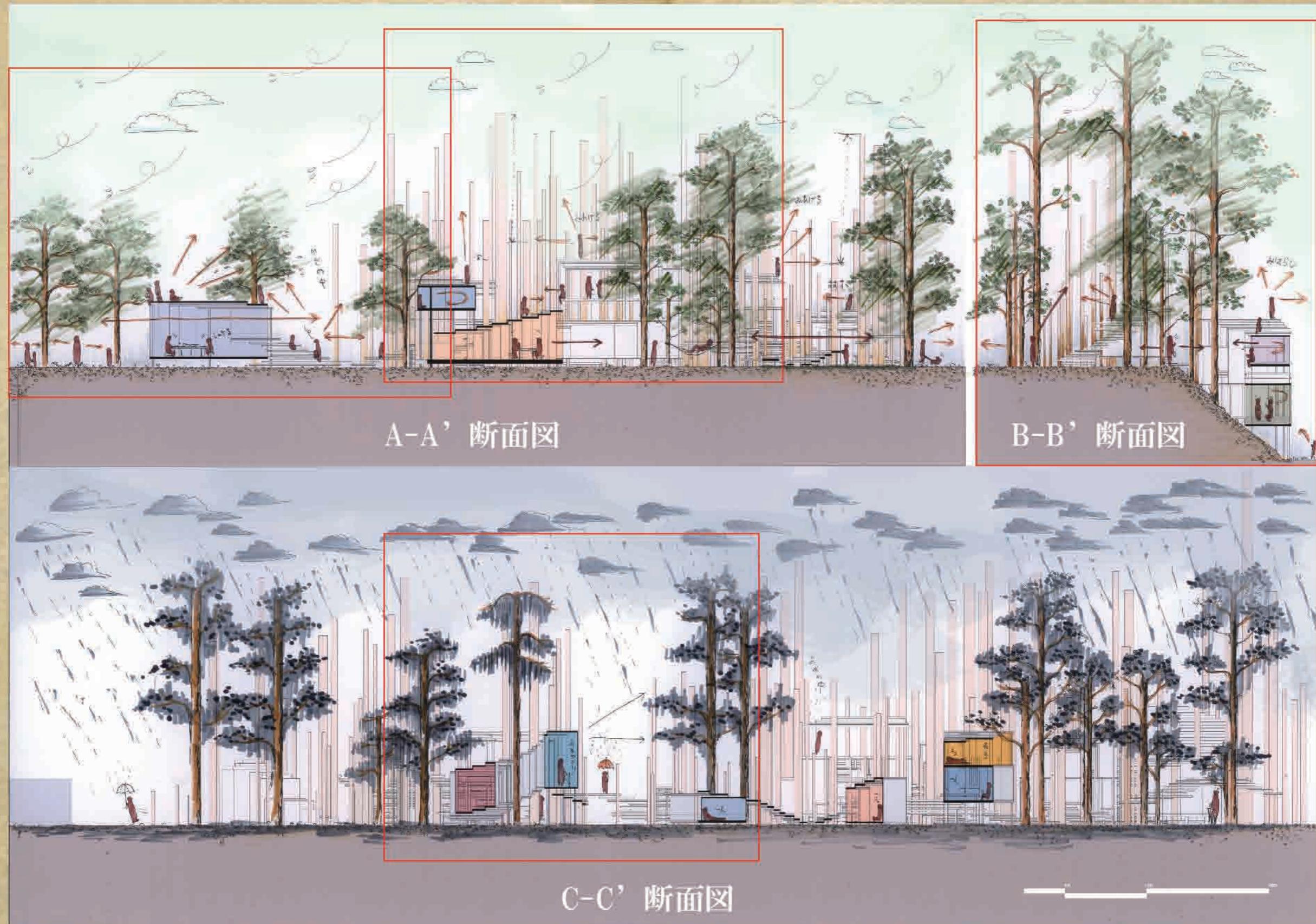
- Plan -



- Elevation -



-Section-



- B-B' section 周辺の情景 -

ケルネル田圃・児童館・公園の境界



児童館・公園の境界 樹木が生い茂る場所 → 個人の小スペース

- C-C' section 周辺の情景 -

自然観察舎・住居の境界



自然を観察する場でもあったり・・・

近所の人達が集まる場所もある

- A-A' section 周辺の情景 -

広場と樹木地帯の境界



DS をしたり、親子で集まったり・・・



洗濯物をほしたりする



新緑を楽しみながら作業をする



人による用途が多くなるため、小スペースが重なる一方で、このように広々とした場も現れてくる。